巻頭言

社会調査のデモクラシー

最近，学生のときに受けたU先生の授業のことを思い出す。科目名は「教育哲学特講」だったように記憶する。思い出すのは，授業の内容ではない。U先生の語り口である。

昼下がりの教室。U先生は，穏やかな口調で自身の教育についての見方を語りだす。そして「…… なんですよね」でことばを結ぶ。そこにはU先生から見た教育の世界が広がっている。「そうか」。わかった気になった私は，ノートに鉛筆を走らせる。

しかし，その瞬間，先生の口からは，「でもね……」の一言が発せられる。「でもね ……」で続けられた先生の話は，ふたたび，「…… なんですよね」で結ばれる。こんどこそはと，私は鉛筆を走らせる。しかし，次の瞬間，耳にするのは，先生の「でもね ……」。

どこまでも続く，「…… なんですよね。でもね ……」。そのうちに午後の気だるさが，私を眠りに誘ってゆく。

これまで何件の社会調査に関わってきたであろうか。どれだけの集計を行い，何枚のアウトプットに目をとおしたであろうか。調査を基にした論文や報告書をどれだけ読み書きしたであろうか。

ふと思うのは，社会調査も「…… なんですよね。でもね ……」のくり返しではなかったかと。

変数を設定し，質問紙を作成する。調査を実施し，結果を見る。自身の見方を変数に託して，社会の見え方を確かめる。社会なるものは複雑である。その複雑さを捉えようとすればするほど，変数の数は増えてゆく。見方が多様になってくる。そのぶん，社会は多様に見えてくる。集計，分析を重ねるなかで，さらには調査を行うたびに「……なんですよね。でもね……」に直面する。いずれにせよ，社会調査の世界は確率の世界である。断定的な結論は得られない。「ありうること（蓋然性）」と「わかること（理解可能性）」を頼りに結論らしきものを定めてゆく。

論文や報告書に描かれた社会なるものも，同様である。社会調査で描かれているのは，それぞれがそれぞれの見方で見たときの社会なるものであり，断定不可能な確率の世界である。「…… なんですよね」のあとに「でもね ……」がまちがいなく待っている。

社会なるものが一つの見方でもって描けてしまい，すべて決定されうるものとして捉えられてしまうことは，社会にとっても，社会調査にとっても不幸にちがいない。「…… なんですよね。でもね ……」は，もどかしくも社会調査のよさである。さまざまな見方でもって自由に社会調査ができる社会のよさである。

つねに仮説を生成し続ける推論の形式を「アブダクション（abduction）」と称したのは，パース（C. S. Peirce）である。そういえば，U先生の授業には，多様な見方や考え方を許容し，命題の真理性と同時に実際性を問うプラグマティズムの気風が漂っていた。自由を重んずるデモクラシーの雰囲気が感じられた。

飯田浩之
社会調査協会 理事